

しかし著者等は、1991年11月24日、南三陸海岸島嶼の植生調査の際、牡鹿町山王島においてマツバラが自生していることを確認した。山王島は牡鹿半島東岸中央部の泊集落から東方約250mの海上にあり、東と西に並ぶ二つの小さな島で構成されている。泊集落に近い西側の島には山王神社が祀られ、比較的自然が保たれている。この神社の南東側の平坦地から緩やかな傾斜地は胸高直径80cmを越すタブノキの大木で構成するタブノキ林によって覆われ、林床は暗く、タブノキの落葉・落枝が多量に堆積している。マツバラはこの林の林床に数十個体が散生していた。ここでの本種は地上生で、草丈が6~13cmの小型な個体がほとんどで、15cmを越すような個体はみられなかった。

山王島の自生地は、桂島のそれとほぼ同緯度にあるが牡鹿半島をはさんで東側の親潮の影響を受ける地域に位置すること、桂島では消滅したことから宮城県では現時点で随一であること、生育個体が比較的多いことなどの特徴を有している。

なお、マツバラが生育しているタブノキ林の

種組成は以下のようであった。

海拔：40m，斜面方位・傾斜角：S15°W・5°，地形：緩やかな尾根，調査面積：15×15m。

（高木層）高さ12~5m，植被率90%，胸高直径40~116cm：タブノキ 5・5。

（亜高木層）高さ5~1.5m，植被率30%：ヤブツバキ3・3，ヒサカキ +。

（低木層）高さ1.5~0.3m，植被率10%：ヤダケ 1・1。

（草本層）高さ<0.3m，植被率30%：タブノキ 1・2，サルトリイバラ 1・2，ヤブツバキ 1・1，マツバラ 1・1，キッコウハグマ +・2，マサキ +・2，トベラ +，キヅタ +，イボタノキ +，ジャノヒゲ +，センニンソウ +，モミ +，ミツバアケビ+，ガマズミ +。

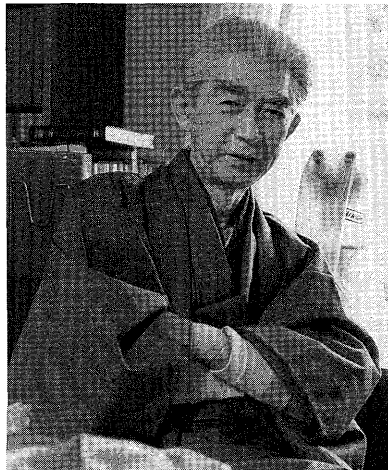
また、採集した標本は東北大学理学部生物学教室の標本庫（TUS）に収蔵する。

（^a岩手大学人文社会科学部生物学教室，^b山形県庁）

追悼

服部新佐さんをいたむ

Dr. Sinske HATTORI 1915-1992



The late Dr. Sinske HATTORI (1915-1992)
（朝日新聞社撮影 1990. 6. 26）

服部新佐さんと最後に会ったのは、昨年(1991)の12月18日だった。5年前までは私の家が杉並区阿佐ヶ谷にあったので、彼が東京の病院に来ると、その帰りに渋谷で会っていたが、私が横浜市に移ってからは、あまり会う機会がなかった。久しぶりに会うことになり、彼は埼玉県に出てきており、私は神奈川県にいたので、真中の東京駅のステーションホテルで会うことにきめた。二人とも出会うよい場所を他に知らないためだった。ステーションホテルは1915年にできた古い建物で、かつてフランス語を習ったことのある辰野 隆先生のお父上の設計であり、大震災にも耐えた。今から思うと、このホテルは服部さんの何かの思い出につながるのではなからうか。ホテルは線路に沿って細長く、左右に入口があって、二人は別々の入口近くの一入はロビー、一入は喫茶店で、互いに長い間相手を待ちわびていた。ついに私の方が、入口の喫茶店で本を読んでいる服部さんを見つけた。

その時はこれが最後の会合になるとは知らなかったが、いつになく長く話し、後には食堂に行って軽い夕食をとりながら話しを続けた。後で服部さんに疲れが残ったのではないかと心配した。服部さんとの話しの中で今思い出すのは、彼の一年後輩の柴田南雄さんを、芸術院会員に推したいということだった。南雄さんはもともと音楽が好きで、音楽家になりたかったが、父上の柴田雄次先生は音楽家では生計がたたないと許されず、叔父さんの柴田桂太先生のおられる植物学教室に入学したのだった。

服部さんは大学に入ってから、顕微鏡で蘚苔類の美しさに魅せられ、専攻の対象とした。私の二年後輩の学生に辻部正信さんがいて、その将来は囁きされていたのだが、体が悪く、1944年2月25日に亡くなった。私には今も彼の特有の顔をありありと思い出すことができるが、それ以外のことは全くおぼえていない。あるいは服部さんは辻部さんの影響も受けたのだろうか。今になって聞いておけばよかったと悔やまれる次第である。

植物学教室の最初の教授、矢田部良吉は白井光太郎に蘚類の、一年下の柘植千嘉衛(つげ ちかえ)には苔類の分類の研究テーマを与えた。植物学雑誌第1号には白井の「蘚苔発生実験記」が記

され、これが我が国で蘚苔類に関する最初の科学的記事である。白井の残した卒業論文を見ると、蘚類数種の鮮明な図と観察が記され、感心せざるをえない。中井猛之進先生から聞いた話しでは、中井先生は「若いとき蘚類を押入いっぱい集めたが、松村任三先生に、その研究では飯が食べぬと叱られてやめた。早田さんは苔類の研究をしていたが、やはり松村先生にやめさせられた」という。

私は白井光太郎先生の著述、その残された本草書を読ましていただいたのだが、親しく学んだことはない。早田・中井両教授は私を指導された先生である。これらの先生方がみんな蘚苔類に魅せられ、しかも経済的理由から途中で他方面に研究を移されたのである。

この点服部さんは違う。服部さんの父上服部新次さんは、宮崎県南で有数の山林王といわれ、金に不自由はなかった。1915年8月10日その長男として生まれた服部さんは、蘚苔類の研究に一生を捧げることができたのである。

服部さんは1933年3月1日宮崎県立飨肥中学校を卒業、同年4月10日宮崎高等農林学校林学科に入学したが、10月25日には病気退学し、1934年第七高等学校造士館理科に入学、1937年3月1日には同校を卒業し、同年4月10日には東京帝国大学理学部植物学科入学、1940年3月31日卒業、4月10日には理学部大学院に入って1年間蘚苔類の研究を続けられた。

服部さんの同級生には車軸藻類を研究する、当時は森岡姓の加崎英男さんがいたし、トウダイグサ科を研究する古沢潔夫さんがいて、いずれも中井猛之進先生の指導下にあった。私は1939年6月30日以来、中井先生の助手であったが、先生がいかにこれら学生を指導されたか、私がどんなお世話ができたか、今や記憶には何もない。

服部さんは1941年5月25日には東京科学博物館学芸官補に任ぜられ、1945年1月15日には同館事務嘱託となった。その間病気がちであったという。柴田南雄さんも植物学学科を出てから東京科学博物館につとめられたのだが、音楽の道を断念できず博物館をやめ、文学部の美学科に再入学し、卒業後も音楽の道一筋に進まれ、今日に至っている。私は植物科では入学試験のとき口頭試問があって、

当時教室主任の柴田桂太先生から「植物学科に入っても就職は保証しないが、それでもよいのか」ときかれたことを思い出すのである。

服部さんは博物館で柴田さんと同僚だったが、しかしその頃は大学はもちろん博物館も、十分に機能していなかったのではないか。1941年12月8日には日本は米英に宣戦布告をし、そして1945年9月2日には連合国に降伏した。

1944年の暮に、その年6月17日に生まれた長女禮子さんを連れて、奥さんのハマ子さんと共に帰郷した。家業に従事するようにとの父上の頼みで、承知せざるを得なかったが、蘚苔の研究は一生続けるとの条件をつけた。そして自ら1946年3月1日財団法人服部植物研究所を設立し、その理事長に就任した。1947年の3月31日付けで、東京科学博物館事務嘱託をやめられたが、その後も国立科学博物館館友として、また時には評議員としてその発展に尽力された。東京大学から理学博士の学位を受けられたのは、1948年2月19日のことである。

中井猛之進先生は1935年、春陽堂から『東亜植物図説』を監輯出版された。第1集には9図をのせ、先生のほか、伊藤 洋、前川文夫、北川政夫、原 寛の諸氏が執筆した。植物学教室には当時植物画家として安達真太郎、加納川郁之助の両氏がいて、先生のために図を描いていた。1936年の第2集には佐竹義輔、津山 尚氏が加わり、同年12月に出た第4集には本田正次先生、木村も参加した。服部新佐さんの最初の植物学上の記述は、第3巻第4集に出た第100図オオスミヨウジョウゴケ(大隅葉上苔 *Leptocolea miyajimensis* Hori-kawa var. *microdentata* Hattori)である。これは1940年だが、前年の1939年9月15日に、それまでこの『図説』の春陽堂との交渉役の前川さんが、召集され中支に派遣されたので、助手となった私がその役を引き受け、敗戦で中断するまで、つまり第4巻第3集(1942年12月)まで続けた。

1940年以後服部さんは植物研究雑誌、植物学雑

誌、博物館の出版物に続々と研究を発表されたが、やがて1947年「財団法人服部植物研究所報告 The Journal of the Hattori Botanical Laboratory — Devoted to Bryology and Lichenology」を発行され、ここの論文が他より多くなってゆく。

彼の日頃の言葉でいうコケ、服部さんの蘚苔類の研究を論じる資格は私にはない。私の強調したいことは、彼が研究所をつくって世界の蘚苔類の標本を集め、文献を整備し、分厚な「研究所報告」を死に至るまで出し続けたことである。自己の植物研究に渾身の努力を重ねた植物研究者の数々を、私は知っている。しかし自己の専門分野で、他人のしかも全世界の研究者の研究に、服部さんほど助力を惜しまなかった人を私は知らないのである。

服部さんは宮崎県の飫肥の植物研究所にこもられていた。しかし世界では有名で、アメリカ蘚苔地衣類学会名誉会員、フィンランド科学アカデミー国外会員、イギリス蘚苔類学会名誉会員、アメリカ植物学会通信会員だった。また郷土の名士だったから、1952年には宮崎県文化賞、1980年には日南市文化功労賞、1990年には日南市名誉市民の栄誉があった。1970年紫綬褒章、1985年勲三等瑞宝章を受けられたから、日本一般でも知られていないわけではないが、一般に彼の価値を知る人が少ないと私は思う。1977年に朝日賞を受賞されたが、近いうちに新聞社が彼を尋ねてくれて、研究所ともども氏を広く紹介しようと、彼自身にも了解を得て実現するばかりだったのに、この度の訃報でがっかりした。

1992年5月12日午前9時消化管出血のため、家人の見守るなかに自宅の日南市本町 3889で眠るように死去された。76歳の服部さんは、顕徳院宝覚性親居士となってしまうたのである。謹んで御冥福を祈る。

彼の軽妙な話しぶりを思い出しつつ、この文章を書いた。データを下さった岩月善之助さん、原稿を整理して下さった金井弘夫さんに感謝する。

(木村陽二郎)